現代行動科学会誌　第38号，83－87（2022）

【第 38 回大会若手部会シンポジウム記録】

テーマ：GANDAI 光のエージェント　―“社会人になる”ことの再考―

村松　星香（岩手大学大学院）
栗村　彩希（岩手大学大学院）

現代行動科学会第 38 回大会における若手部会シンポジウムは、「GANDAI 光のエージェント　―”社会人になる”ことの再考―」というテーマの下、異なる領域や異なる地域でご活躍されている 39～41 期の若手会員 4 名をシンポジストとしてお迎えした。シンポジストの方々には、社会人として働き始めてからの生活や価値観の変化についてそれぞれの視点から主張していただき、「社会人になること」について議論した。

2019 年に新型コロナウイルスが蔓延し、現在も感染が拡大している。コロナウイルスの拡大が学生の生活にもたらした変化は大きく、アルバイトの労働時間の削減により大学生の収入は減少し、就職活動も氷河期に差し掛かっている。生活が困窮した学生を支援する目的で食材や日用品を無料で配る催しが各地で行われているが、未だ将来に希望を持つことが困難な若者は多い。

今回の若手部会シンポジウムでは、コロナ禍で大学生活を送る岩手大学生からの声を聴いた上で、コロナウイルスが拡大する中で就職活動を経験したシンポジストの方々の生活の変化や感じたことの語りを聴き、「社会人になる」という将来像を皆様と再考しようという目的で、企画したものである。シンポジストとしてお招きしたのは、40 期の山崎航平さん、40 期の藤澤由羽さん、41 期の吹田ひよりさん、39 期の石黒ゆかりさんであった。

シンポジストの方々の発表の前に、現在の大学生が抱く「社会人になることのイメージや意識」についてのアンケート調査の結果が、大学院生より話題提供として報告された。

表 1. 岩大生が抱く「社会人になること」についてのイメージ（KJ 法による分析）

社会の役割を達成すること	社会構成員	社会的役割の達成(2)　社会の一員(2)　協力(1)　生産者(2)	7
	責任所持	責任感(12)　義務(1)　税金の支払い(2)　奨学金返済(1)	16
「自分」として生きていくこと	自立	自立すること(5)　一人で生きていくこと(2)　自己管理(3)　お金を稼ぐ(2)	12
	成長	大人になるということ(2)　スキル獲得(1)　親孝行(1)	4
	主体性	当事者意識(1)　自主性(1)　生き方の目標決め(2)	4
不自由になること	諦観	悲観(1)　妥協(1)	2

表 1 より、大学生は社会人になることを「社会の役割を達成すること」、「自分として生きていくこと」あるいは「不自由になること」として捉えていることが明らかになった。特に責任を持つ必要性は、多くの大学生が感じている様である。また、回答者のうち 82.4%が社会人として活動することに不安を抱いており、その理由として「責任の拡大」が多く挙がっていた。大学生は社会人を責任ある存在と認識し、負うであろう責任に対して不安を抱いていることが明らかとなった。ここで、行動科学を旅立ち社会に潜入する先輩エージェント（卒業生）の方々より、社会人になることについてご報告をいただいた。

シンポジストの方々には、それぞれの視点から『社会人になること』についてお話を伺った。1人目のシンポジストの山崎さんからは、サービス業の立場から「社会人になること」についてお話しいただいた。山崎さんは、衣類を提供するサービス業に勤務し、多くの人に対して洋服を勧める中で、社会から臨機応変に対応することが要求されているとお話していた。コロナウイルスの感染拡大を防ぐ目的で、不要不急の外出を控えるよう国が推奨していることから、対面による買い物が困難な状況になっている。限定された状況の中でどのように行動するのが最も有益かを考え、実行することが今後必要になると締めくくられた。

2人目のシンポジストである岩手県信用保証協会の藤澤さんからは、大学時代に活動していたボランティア活動や、社会人になってからの変化についてお話を伺った。藤澤さんは大学時代に地域の活気を高めるようなボランティア活動を行っており、社会人になった現在も継続しているという。社会人として立場や環境が変化するにあたり、自分の好きなことや、やりたいと思えることを諦める必要はないことをお話しいただいた。

3人目のシンポジストである青森県児童相談所の児童心理司の吹田さんから、「社会人になること」について、正と負の両面に着目し、お話し頂いた。心理司として、愛護手帳の判定や子供に関する相談の対応、虐待の対応等の業務に従事する中で、プライベートな時間の制限や仕事の責任といった負の側面を感じる一方、社会とのつながりや生活の安定といった正の側面を感じることが語られた。また、参加する学生らに向けて、現在の自由な時間を活用し、様々なことにチャレンジしてほしいと語られ、多くの経験を人生の糧とすることで、魅力的な人材になれるとのことだった。

4人目のシンポジストである福島少年鑑別所の法務技官の石黒さんから、社会人3年目となった自分が考える「社会人になること」とはどういうことなのか、お話し頂いた。まず、石黒さんが勤める少年鑑別所の概要や法務技官の業務、学生時の生活を説明して頂いた。そして、石黒さんが考える「社会人」になることとは、①健康に働くこと、②想定外に対応できる余裕をもつこと、③自分の限界を把握することであることが語られた。そんな石黒さんは、ご自身を「社会人」になっている途中だと捉え、今後も頑張っていきたいという強い意志と自分で自分を大事にすることの大切さをお話し頂いた。

今回のシンポジウムを通して、異なる業種の方々から、それぞれが考える「社会人になること」をお聞きすることができた貴重な機会であった。社会人という学生とは異なる身分や新型コロナウイルスの流行、社会人としての責任・重圧等が重なる中で、粉骨砕身して働くばかりでなく、自分の心身の健康に気を使ったり、趣味やプライベートな時間を大事にしたりすることが大切であり、プライベートと仕事を両立させられる社会人の在り方の重要性が感じられ、仕事や会社への適応と自分自身への適応の2つを両立させられることが、真に社会に適応しているということなのだろう。これから社会人になる我々にとって、有用なご意見ばかりであり、社会人になるにあたり、「社会人になること」から更に突き詰めたテーマ、例えば、社会人としての姿勢や仕事と私生活の両立等を考える機会となったのではないだろうか。

最後に、シンポジウムの開催にあたり、お忙しい中貴重なお話をしていただいた4名のシンポジストの方々、並びに質疑応答にて議論を盛り上げてくださったフロアの参加者の方々に、深く感謝申し上げます。